

# 日本ペルー外交関係 150年の歩みと展望 —太平洋が繋ぐ戦略パートナーシップの強化

片山 和之（在ペルー大使）

## ラテンアメリカ諸国最初的外交関係樹立

日本とペルーの外交関係樹立の契機は1872年に発生した「マリア・ルース号」事件である。マカオから中国人労働者（クーリー）約230名を乗せてペルーに向かっていたマリア・ルース号が悪天候のため横浜に寄港した。その際に、船内の劣悪な待遇に耐えかね救助を求めてきた者がいた。日本政府は調査の結果、彼等全員を清国に送還することを決定したが、ペルー政府はこの措置に反発した。

事件翌年の1873年、ペルーは謝罪と損害賠償を要求すべく、マヌエル・バルド大統領（当時）によりアウレリオ・ガルシア・イ・ガルシア海軍大佐（特命全権公使）が日本に派遣された。両国政府代表団による交渉の結果、同年8月21日に副島種臣外務卿とガルシア公使との間で友好通商航海条約が東京にて署名され、日・ペルー間に正式に外交関係が樹立されるに至ったのである。日本にとりラテンアメリカ（中南米）諸国で初、ペルーにとってもアジア諸国で初的外交関係樹立であった。本年（2023年）はそれからちょうど150周年に当たる。なお、マリア・ルース号事件の処理については、国際仲裁をロシア皇帝アレクサンドル2世に依頼することとなり、1875年、日本政府の措置は一般国際法に照らして妥当であったとの判決が出され、ペルーの要求は退けられた。

## 150周年記念行事

本年2月、周年記念ロゴマークの共同発表及び回顧展を伴う150周年開幕行事がペルー外務省の玄関ホールにて盛大に行われた。その際、副島及びガルシア両者によって署名された150年前の条約原本の展示も行われた。両国外交関係史小冊子作成、記念切手・硬貨発行、海軍・海自練習艦隊の相互訪問、大使館主催大型文化行事、日本庭園（100周年記念として市内博覧会公園内に設置されリマ市に寄贈されたもの）再生計画、各種叙勲・表彰式、国際交流基金リマ文化センター設立、日ペルー経済協議会（東京）の開催、姉妹都市交流、要人往来等々官民による様々な文化・学術・経済・政治・人物交流行事が年間を通じて実施乃至予定されている。要人往来では、5月初旬にボルアルテ政権（昨

年12月発足）で初の外国要人（首脳乃至外相）となる林芳正外務大臣のペルー訪問が実現し、多くの具体的な成果を上げ、150周年を飾るハイライトの一つとなった。近くヘルバシ外務大臣の訪日も計画中である。

なお、執筆者がガルシア全権代表の曾孫に当たるディエゴ・ガルシア元外相と会った際に、当時明治天皇から下賜されたという唐獅子像の蓋が付いた大きな花瓶が今も自宅に飾られているという話を伺い、両国関係の歴史とともにその友好交流が末代に引き継がれていることをとても嬉しく感じた。



写真1：外交関係樹立150周年立ち上げ行事（イゲラス外務副大臣と（ペルー外務省提供）



写真2：ガルシア全権の子孫が所蔵している明治天皇の下賜品（ディエゴ・ガルシア氏提供）

## 近代日本最初の海外投資

明治以降の我が国による海外投資を語る際に忘れてならないのが、高橋是清を始めとする日秘鉱業株式会社によるペルー・カラワクラ銀山開発事業である。これは、近代日本初の本格的海外投資事業であった。ある時、高橋は欧米を視察した印象を、「日本人がビジネスを目的に海外渡航することは稀であり、仮にあったとしても専ら欧米先進国を回るばかりで、先方からはまともに相手にされない。文明や富の程度が低くても、国民が傲慢でなく、土地が広く、スペイン語やポルトガル語が話される中南米市場をむしろ日本は真剣に開拓すべきである」と知人に対して語ったことがある。そのことが契機となり、当時特許局長であった高橋は、職を辞しペルー銀山開発に参画することとなる。

1890年ペルーに赴いた高橋であったが、鉱山開発事業は事前調査を行った専門家の報告書が杜撰であったため失敗に終わり、短期間で幕を閉じることとなる。彼自身も大きな借金を抱え、東京の家屋敷を売却して小さな借家住まいを余儀なくされたという。しかしながら、この事業は近代における日本企業の海外投資の先鞭をつけ、また、1899年から始まるペルーへの日本人移住に繋がる先駆けともなった。

ちなみに、ペルー側共同出資者であったオスカー・ヘーレン（ドイツ人商人として1869年来日、初代駐日ペルー名誉領事。その後、ペルーに移住）の甥であり、かつ、パルド大統領の末裔にも当たるアドルフ・ヘーレン氏は現在、三菱商事が40%出資して2022年に操業開始したケジャベコ銅鉱山（総開発費55億ドル、山命約36年）を運営するアングロ・アメリカン・ペルー社 CEO である。不思議な歴史の縁である。

## 日本人のペルー移住

移民取扱業者であった森岡商会代理人の田中貞吉は、米国留学時代の知己であったペルー人実業家アウグスト・レギア（後の大統領）との縁を頼りペルー側に働きかけ、最終的に両国政府間交渉が妥結、大統領令が公布され、1899年よりペルーへの日本人契約移住が組織的に開始された。日本郵船佐倉丸で横浜から太平洋を渡り、リマ郊外のカヤオ港に到着した最初の契約労働者は790名であった。到着日の4月3日は後に、「日・ペルー友好の日」に制定され、毎年日系移住者の先達を偲び、日系人・日系団体を顕彰する行事がペルー議会や日系人協会によって行われている。

契約移民制度が終了する1923年までの約25年間に移民会社4社を通じて82回の配船で102グループの移民団、合計1万8000人強（男性が9割）の日本人移民がペルーに渡った。これら契約移民の他、自由移民を含めた戦前のペルーへの日本人移民総数は約3万3000人であった。邦人社会は当初の「故郷に錦を飾る」出稼ぎから、戦前の反日運動、戦時中の資産没収と米国収容所への送致等の苦難の歴史を経て、戦後はペルー社会に骨を埋める道を選択し（即ち「日本人」から「日系人」への転換）、不断の努力により今日の確固たる地位と信用を確立した。ペルーは戦後、日本人契約移住を受け入れておらず、現在3世、4世が中心となるペルー日系人はその数約10万人と言われてきたが、日系人協会とRENIEC（全国身分登録事務所）の協力による最新調査結果によれば、約20万人と大幅に上方修正された。海外日系人社会の規模としては、ブラジル、米国に次いで3番目である。一方、日本国内には約5万人の日系を中心とするペルー人が居住し、両国の橋渡しの役割を果たしている。国・地域別在日外国人では11番目に位置する。

## 初の日系人大統領

アルベルト・フジモリは、熊本県出身の日本人移住者2世として、1938年にペルーで出生した。彼が1990年に日系人最初の大統領に選出された際には、多くの日系人は複雑な心境を抱いたようである。一国の元首に同じ日系人が上り詰めたことは大きな誇りである。同時に、戦前の反日・排日運動の記憶に起因するトラウマから、ペルー社会で日系人の行動が目立ち過ぎ、批判の矢面となることへの懸念を抱いたのも事実であり、これら2つの複雑な思いが錯綜したようである。実際、当時の関係者によれば、ペルー日系人協会は組織決定としては候補者に対する中立の立場を堅持したが、決選投票に進んだフジモリ陣営に対し、顧問グループは非公式に立候補辞退を働きかけた由である。もっともフジモリは、「自分は日系人ではなくペルー人の代表である」と、説得には応じなかった。

当初、泡沫候補とみられた彼は、本命のバルガス＝リヨサ候補（後のノーベル文学賞受賞者）を決選投票で破り当選した。彼の勝利は、日系人の象徴でもある「誠実、勤勉、技術」を標語に、貧困層や既成政治に幻滅した層の支持を獲得した結果であった。3期目の初めに至るまで計10年余りに亘って政権の座に就いた彼の業績に対する評価は分かれている。熾烈を極め

たテロを抑え、深刻な経済危機を脱した手腕への高い評価がある反面、議会を閉鎖し憲法を一時停止（自主クーデタ）した強権的手法や、大統領3選、更には、人権問題や汚職、日本への「避難」に対する批判も根強い。2000年のブルネイ APEC（アジア太平洋経済協力会議）の帰路立ち寄った日本から辞表を提出したが、議会は受け入れず彼を罷免した。その後、2005年離日し、チリに向かうもそこで逮捕され、2007年にペルーに身柄が引き渡された。人権侵害等を理由に裁判が行われ、2010年に最高裁において禁固25年の判決が確定した。現在も収監中であるが、回顧録を執筆中であり第1巻が出版されている。なお、2021年の前回大統領選挙では、長女のケイコ・フジモリ氏が、連続3回目となる決選投票進出を果たすも、またもや僅差で涙を飲むこととなった。

### ペルーの戦略的重要性

執筆者は外務省生活約40年の間、今回の赴任に至るまで恥ずかしながら一度もペルーはおろか、南米に足を踏み入れる機会がなかった。3年近く現地で生活することにより、日本にとってのペルーの戦略的重要性を深く認識し、国際関係をより広い視野で俯瞰できたことは幸運であった。

第一に、両国は重要な経済パートナーである。ペルーにとり日本は第3位の輸出先であり、第4位の貿易相手である。また、銅や亜鉛を始めとする鉱物、農水産物資源の主要供給国であり、EPA（経済連携協定）やCPTPP（環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定）といったバイ及びマルチの経済連携協定で結ばれている。日本の科学技術への期待は高く、中南米最大規模のODA供与実績（累計）を有する。

第二に、両国は自由、民主主義、人権、法の支配を共有する価値のパートナーである。ペルーはロシアのウクライナ侵略を強く非難している。

第三に、ペルーの対日好感度は非常に高い。日系人や日本企業が築いた信頼と親日的土壌は両国関係の発展に大きく寄与し、また、約5万人の在日ペルー人は両国の橋渡しの役割を果たしている。

第四に、両国はAPEC、CPTPP、FOIP（自由で開かれたインド太平洋）を推進する上での太平洋のパートナーである。南米諸国で首都が太平洋に面しているのはペルーのみである。

第五に、ペルーは歴史、文化、自然に富んだ国であ

り、アンデス考古学、防災（地震・津波等）、環境保全、文化、観光、料理等の分野で両国専門家や国民間の交流や協力は深化している。

第六に、ペルーの公用語はスペイン語である。スペイン語は世界20か国、5億人以上の人々が話す英語に次ぐメジャーな言語である。

第七に、ペルーは将来性のある若い活気のある国である。ペルー人の年齢中央値は29歳（日本48歳）であり、今後50年間は人口が増え続けると予測されている。

第八に、ペルーを含めた中南米地域は、近代以降の日本外交の地平を拓いた重要な地域である。アジア以外で日本が結んだ最初の平等条約の相手国はメキシコである（1888年）。この地域は、明治以降日本人の主要な移住先であった。日清・日露の戦役ではチリ及びアルゼンチンから軍艦の提供を受け勝利に貢献した。日本が最初に締結したEPAの相手はシンガポールであったが、同国は都市国家であり農業問題は基本的になかった。その意味では、2005年に発効したメキシコとのEPAが実質的には最初とも言えよう。中南米には33か国（国連加盟国の17%）が存在し、ASEANの約2倍のGDPを有する。2050年のGDP予測では、ブラジルが世界5位、メキシコ7位、日本が8位になるとの数字もある。



写真3：救急車供与式（ボルアルテ大統領、ヘルバシ外相、グティエレス保健相と）（在ペルー日本大使館撮影）

### 日本人の対中南米認識と今後の課題

田中耕太郎東京帝国大学教授（当時。戦後文部大臣、最高裁長官、国際司法裁判所判事を歴任）は、外務省の委嘱を受け、1939年に半年近く中南米を巡り、その結果を元に『ラテン・アメリカ紀行』（岩波書店）を著している。その中で、中南米の重要性を指摘するとともに、そのことへの日本人の認識が如何に低いか

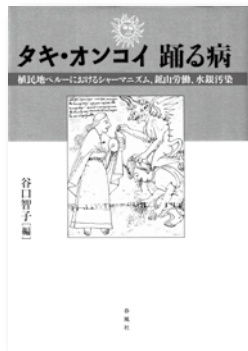


を嘆いている。それから80年以上経過した今日、日本人の対中南米認識にそれほど本質的な変化がないことは遺憾である。もちろん、その一端には、ペルーの現下の政情不安定に示されるように、自らの持つ潜在性を十分開花できない彼等自身の内在的要因が存在することは否定できない。しかし、日本として将来を見据えた場合、より主体的、能動的、かつ積極的にペルーを含めた中南米地域とのあるべき関係を真剣に模索していく必要があるのではなからうか。日本とペルーは太平洋が繋ぐ「隣国」であり、戦略パートナーなのである。

2024年は、ペルーが3度目のAPEC議長国となる。同時に、日系人移住125周年を迎える。そして、2025年はペルーも正式参加を表明した大阪・関西万博が開催される。即ち、今後数年間は両国の戦略パートナーシップを更に高みに上げるための絶好の機会である。まずは、本年の外交関係樹立150周年が、日本人の対ペルー関心拡大の契機となることを願ってやまない。

(かたやま かずゆき 在ペルー日本国大使)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『タキ・オンコイ 踊る病 — 植民地ペルーにおけるシャーマニズム、鉱山労働、水銀汚染』

谷口 智子編 春風社  
2023年2月 327頁 4,700円+税 ISBN978-4-86110-826-6

1560～70年代のインカ帝国征服直後のアンデス諸国で銀鉱山が発見され、銀採掘ブームとなり、先住民を強制徴用する「ミタ制」が行われるとともに、精錬のための「水銀アマルガム法」が取り入れられた。表題の「タキ」はケチュア語で歌い踊る、「オンコイ」は病のことだが、当時先住民の間で「アンデスの先祖古来の信仰に戻れ」という運動の名としてスペイン人司祭に記録された。これがカトリック布教の妨げになると根絶が図られたのだが、「タキ・オンコイ」が宗教運動なのか、民俗舞踊なのかは見方が分かれる。編者はスペイン統治時代の記録で震えや描写から水銀中毒症状を疑い、水俣病研究者（中地繁晴熊本大学水俣学現地研究センター長）に水銀中毒症状を、歴史学者（立岩礼子京都外国語大学教授）にローマ時代から20世紀に至るまで続いた水銀鉱山労働とその中毒を、ペルーの医師・人類学者（サンタマリア・ファレス国立サン・マルコス大学教授）に16世紀ペルーにおけるタキ・オンコイについて検証を依頼するとともに、宗教史における水銀と鉄踊りなどのシャーマニズムを編者が紹介し、歴史の闇に埋もれたタキ・オンコイが、スペイン宗主国に莫大な富をもたらした銀生産のための水銀によってインディオの血肉を吸っていたことを示唆している。歴史の闇を明らかにした興味深い研究書。

編者は宗教学、ラテンアメリカ地域研究を専門とする愛知県立大学外国語学部教授。

(桜井 敏浩)